

千葉県を走る観光鉄道から地域のあり方を考える授業の開発 —いすみ鉄道を題材に—

山本 茜子

千葉大学教育学部学生

学校において身近な地域を学習する、地域学習の重要性は高い。しかし、学校における地域学習の実態では、教師は必ずしも赴任先の学校がある地域出身であるとは限らず、知らない地域であることがほとんどであり地域素材を教材化することに負担を感じている。このような現状から子どもたちが十分な地域学習をしているとは言い難い。本研究では、千葉県を身近な地域とし、千葉県夷隅地域を走るいすみ鉄道を取り上げ、授業を開発、実践することで、生徒たちが住む身近な地域学習を社会科の枠組みで行い、身近な地域学習の在り方と作成した授業プランの有効性とその課題を明らかにした。その結果、生徒の身近な地域への興味関心が高まった。また、実際に身近な地域について調べたり、訪れたりしていた。しかし、視覚的にわかりやすい教材を準備したり、いすみ鉄道とJR線との違いを補足的に説明したりするなど配慮の不十分な点も見られた¹。

キーワード：地域学習、身近な地域、いすみ鉄道、社会科、授業の開発

1. 問題の所在

国土交通省において、地域鉄道は以下のように定義されている。

1.1. 日本の鉄道の現状

日本の旅客輸送量はモータリゼーション²の進行に伴って、1979年に自動車にとって代わられた。そして、鉄道は輸送量の通減に直面している。2015年に行われた国勢調査³では人口減少が始まっていると報告されているため、急激に鉄道の旅客輸送量が増えることはないと考えられる。現在、人口が少ない場所ではさらに人口が減少し、人口が多い場所においても人口が減っていくことが予想される。

多くの鉄道路線は採算が合わない状況で経営されていたが、このように人口が減少し、モータリゼーションが進んでいる今の日本において非都市圏の鉄道が採算を確保することはさらに困難である。都市から地方へいくごとにモータリゼーションは浸透しており、車がなくては暮らしていけない地域も多い。しかし、公共性が高い鉄道を即座に廃止することは難しい。

このような非都市圏である地方の地域鉄道は長年赤字経営で悩んでいることが多い。多くの鉄道路線が撤退（廃止）されている現状からみても公的資金に頼っているだけでなく、事業者が自ら収益を得なければ存続することが困難であるといえる。

1.2. 地域鉄道の現状

一般に、新幹線、在来幹線、都市鉄道に該当する路線以外の鉄道路線のことをいい、その運営主体は、JR、一部の大手民鉄、中小民鉄及び旧国鉄の特定地方交通線や整備新幹線の並行在来線などを引き継いだ第三セクターです。

また、地域鉄道は地域住民の移手段としての役割を担ったり、地域の経済活動の基盤になったりしており、重要な社会インフラとして位置づけられている。しかし、地域鉄道の現状としては、1.1.でも述べた通りモータリゼーションの進行や人口減少により、多くの鉄道事業者の鉄軌道業の経常収支ベースで赤字を計上している。

このように現在、地域鉄道を取り巻く現状は厳しく、赤字経営をしている会社が多い。しかし、地域鉄道は地域の人々の足を支える重要な社会インフラであるため、地元自治体をはじめとする地域が中心となって地域鉄道を支える役割を担うことが重要である。

一方で、「クルマはドア・ツー・ドアでどこにでも行くことができ、便利です。道路を重点的に整備したほうが、住民やまちの発展のためにも役立ちませんか。」という鉄道が社会インフラとして必要であるか疑問の声もある。実際に、昨今では地域鉄道の輸送人員はゆるやかな減少傾向にある。今後、急激な人口減少の下で地域の公共交通機関をめぐる環境はより一層厳しいものとなることが考えられる。このような中では当然、鉄道は

Akane YAMAMOTO : Development of a Class to Study of the Area from Tourist Railway in Chiba Prefecture Isumi Railway as a Subject Student, Faculty of Education, Chiba University

廃止の方がよいという声上がるが、鉄道を廃止することに反対の地域も少なくない。

国土交通省の資料によると、鉄道廃止による地域への影響として、「高校生や高齢者等の移動制約者の足の喪失・駅前商店街の衰退、観光客の減少等・マイカーによる転換による通勤時間帯の交通混雑の増大」があげられている。北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀河線の廃止から堀畑（2010）は、鉄道から代替バスへ転換したことにより所要時間が増え、交通弱者である高齢者等は移動手段を奪われ、マイカーへと転換したことを述べている。北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀河線が廃止された例から鉄道が廃止されたことで、地域の活気がなくなり、人も地域の外に出てしまうことが予想され、経済的な衰退が加速すると考えられる。

2013年6月に国土交通省鉄道局・観光庁が出した、地域鉄道再生・活性化等研究会報告書「観光とみんなで支える地域鉄道」には、地域鉄道が地域活性化のための観光資源になりうる価値について述べていた。報告書には地域鉄道の「観光資源」の価値について、

地域鉄道の「観光資源」の価値は、大きく分けて2つあります。1つ目は、地域鉄道自体が「観光資源」としての価値を持つ場合、2つ目は別の観光資源と組み合わせることにより、一体として「観光資源」になる場合です。

と記述されていた。鉄道を経営している事業者だけが取り組むのではなく、沿線地域の住民と協力して観光客のニーズを絞り、地域鉄道を地域の観光資源として価値をみだしていく必要があるといえる。

1.3. 地域鉄道と観光鉄道

1.2.で述べたように、地域鉄道には観光資源になりうる可能性がある。地域に観光資源があることで外部から多くの人を呼び、その外部から来た人、いわゆる観光客が地域にお金を落とすしていく。観光客がお金を落とすことで経済的に地域が潤い、人が集まることで地域を活性化させることができる。また、「人を呼ぶ」ということはある地域が活性化することだけではなく、近隣の他地域の活力にもつながるともいえる。人口減少が起きている日本では地域のなかだけではもうどうにもならない。経済的に潤っていない地域は外部からの力を借りていかなければならない。堀川（2007）は観光について、

観光は、個人の幸せや豊かさなど人間の基本的欲求（自己実現欲求）を満たすものという個人の側面から見る観光と、地域振興のための社会的環

境や条件整備、経済（外貨獲得も含む）効果・雇用面など国家・社会・経済面から見た観光、加えて異文化理解・国際交流の促進など、多くの側面からその重要性が増している。

と述べており、地域活性化において観光が持つ役割は大きく多くの側面を持っていると考えられる。

鉄道自体は通勤・通学・通院・買い物などを行う沿線住民の交通手段として日々の暮らしを支えているものでもあるという認識を忘れてはならないが、このような役割を維持したまま地域を走る鉄道であるために観光鉄道として生まれ変わり、地域が活性化した事例がある。

1.4. 千葉県を走る観光鉄道を利用した地域の活性化

千葉県は東京に程近い距離に位置している。海に面しているため、漁業資源に恵まれている。また、東京に近いため、近郊農業も盛んだ。千葉県の地域の分け方は様々であるが、ここでは千葉県を千葉地域・東葛飾地域・印旛地域・香取地域・海匝地域・山武地域・長生地域・夷隅地域・安房地域・君津地域の合計10の地域に分ける。恵まれた環境にある千葉県だが、地域によって人口の偏りは激しい。千葉県の人口は北西部に集中しており、北東部や南部の人口は減少傾向にある。そして、千葉県の各地域には観光地として多くの人が訪れる場所がある。

また、千葉県には多くの鉄道が走っており、地域鉄道も少なくない。千葉県商工労働部観光企画課が出した千葉県観光入込調査報告書に基づく地域区分によると、特に観光客入込数が少ない地域としては夷隅地域があがる。夷隅地域を走る地域鉄道はいすみ鉄道があり、一時期は廃線寸前まで陥ったが現在は観光鉄道として以前より多くの観光客を招いている。1.2.で述べたように地域鉄道を取り巻く環境は厳しい。

現在のいすみ鉄道社長である鳥塚亮は、観光客の中でも鉄道ファンにターゲットを絞り、観光客が来るようにいすみ鉄道の観光鉄道化に尽力した。絞ったターゲットがどのようなものを求めているのかを考えた上で施策を講じ、今では多くの観光客に来てもらえる環境をつくり、地域にお金が落ちる仕組みを構築し続けている。沿線地域の住民の力や自治体、鳥塚社長が講じた施策により、廃線を免れて地域の足として存続し、今では観光地としてメディアで紹介されるまでになったのである。

1.5. 千葉県の観光鉄道について学習する意義

現在、「まち・ひと・しごと創生基本方針2015－ローカル・アベノミクスの実現に向けて－」を第2次安倍内閣が閣議決定したことや2016年3月に規制改革により地方創生特区が設置されたことで、地域活性化の声が大

きくなっており、地方創生のエネルギーとして観光資源の構築が唱えられている。日本の人口は減少傾向にあり、それぞれの地域は生き残りをかけてどのようにして地域活性化を実現し、残していくのかを考えている。地域の現状は様々だが、人口減少は避けられない問題だ。人口減少問題以外にも少子高齢化問題、ゴミ問題、雇用問題、医療問題、教育問題など課題は山積している。課題解決のためにはデータに基づいて地域の方針を決定することが多い。そして、千葉県という地域の方針を決定したり、千葉県の特性について学習したりする際にも多くのデータを基にして、千葉県の北西部と北東部、南部の格差や高齢化率の高い地域についての対策など、千葉県が抱えている課題や予想される今後の動向などを説明できることが多い。千葉県を走る地域鉄道である、いすみ鉄道が抱える現代の問題から、地域の生き残りをかけて、地域の活性化へとつながった例をみていくことで子どもたちの知らない千葉県の姿を学習することが出来る。

鉄道は、子どもたちが目にする身近なものの1つである。車を持たない移動制約者の子どもたちが移動する際に使用する公共交通機関として鉄道やバスが考えられる。地域鉄道については、子どもたちが自分たちだけで乗る機会が少ないかもしれないが、存続が危ぶまれている公共交通機関が存続のために行っている取り組みを学習することで、地域への愛着や興味関心を持つことが出来ると考えられる。

1.6. 学校における地域学習の実態

学校現場において、千葉県について学習する機会を確保することは容易ではないと考えられる。小学校では『すすむ千葉県』という副読本を用いて千葉県の歴史や産業、その特性について学習する機会が設けられている。しかし、中学校では学習指導要領に身近な地域の学習について示されているにもかかわらず実施されているのか疑問に感じた。荒井(2005)は地域学習の現状について、

小学校で社会科を担当する教員は、社会科を得意とする教員ばかりではない。そのため、社会科を担当する教員の中からは、中学年の地域学習に関して、「地域の社会事象をよく知らない」、「地域素材を教材化することが負担である」、「地域素材の教材化の仕方が分からない」等の発言が聞かれることがある。

と述べている。教師は必ずしも赴任先の学校がある地域出身であるとは限らず、知らない地域であることがほとんどであり、地域素材を教材化することに負担を感じて

いるといえる。このような現状で、子どもたちが十分な地域学習をしているとは言えないと考えられる。

一方で、地域学習はそれなりになされているのではないかと考えられる。しかし、岩橋(2008)が行った地域学習指導における教員の意識調査によると、「各学校においては、教材研究に充てる時間の確保が難しかったり、地域を探索するような時間的余裕がなかったりすることが推察できる。」と示されており、時間的に余裕がなかったり、教師が地域を知らなかったりすることで、すべての教師が身近な地域学習を十分に行っているとはいえないと考えられる。また、子どもたちの傾向と身近な地域の学習に対して、碓井(2008)は、

現在の子供たちは、球面上で地球規模の位置関係をとらえる技能やその基盤となる地理的知識、地図力、統計力、日本の自然環境に関する知識が不十分で、観察や調査などを通して自分達の身近な地域の特色を調べる学習(地域調査)を忌避する傾向(嫌い45.6%、好きが28.9%)などが見られる。

と述べている。子どもたちが身近な地域を調べる学習を不得手とする傾向があり、教師も地理教育における力量不足から指導困難であると感じていることで、現実には地域学習を行っている教師はそれほど多くはないことが実態として考えられる。

1.7. 身近な地域を学習する重要性

1.6.で述べたことからわかるように、小学校から高等学校を通して行われるべき地域学習を、すべての教師が子どもたちに対して、十分に行っているとはいえないと考えられる。「生徒が生活している地域の課題を見いだし、地域社会の形成に参画してその発展に努力しようとする態度を養う。」と学習指導要領の「身近な地域」に示されているように、変わりゆく現代社会をこれから担っていく子どもたち自身が、自ら生活している地域に目を向けることが大切である。また、住んでいる地域への愛着であったり、伝統文化を継承しようという心持ちであったり、目の前の課題解決のために取り組む姿勢であったりといったことを自分自身で考える力が必要になってくる。このような地域学習で修得した力によって、社会科の学習指導要領で述べられている「公民的資質」を身に付けることが可能であることから、荒井(2005)「社会科の学習のスタートである地域学習は重要である」と述べている。

1.8. 身近な地域学習の先行研究

身近な地域学習の先行研究として、ここでは2つあげる。1つ目は、松岡・佐藤(2012)が行った授業実践

についてだ。中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習として仙台の交通問題を扱っている。単元は全 8 時間で構成されており、導入・問題把握・問題分析・意思決定・社会参加の大きく 5 つに分けている。この研究では、言語活動の充実を図ることで、生徒は意欲的に授業に取り組んでおり、身近な地域ということで積極的に活動にも取り組むことができていたようだ。

2 つ目は岡山県教育センター（2001）によって行われた地域学習の実践についてだ。地域の姿を多角的に見つめ、玉野市の未来像を考える授業であり、3 年間を見通した指導計画になっている。身近な地域の学習単元を 3 年間を見通した指導計画に沿って行き、地域を対象とした調べ学習を重ねることで、生徒がある地域とある地域に住む人々への理解や課題に目を向けることができ、地域の一員としての自覚を芽生えさせることが出来ているといえる。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、千葉県夷隅地域を走るいすみ鉄道を取り上げ、授業を開発、実践することで、生徒たちが住む身近な地域学習を社会科の枠組みで行い、身近な地域学習の在り方と作成した授業プランの有効性とその課題を明らかにすることである。

研究は以下の方法で行う。

- ① いすみ鉄道を題材とした 3 時間扱いの授業単元を作成する。
- ② 千葉大学教育学部附属中学校（以下、附属中学校）の 3 年生前期・選択教科「ローカルな変化から社会の変化を読み解くーおもちゃ工場からローカル鉄道までー」を受講している 11 名を対象として実践する。
- ③ 授業中の生徒の実際の様子、生徒による事前・事後のアンケートの記述、授業毎の振り返り、授業後のヒアリングから授業を考察する。なお、生徒による事前・事後アンケートには同一の項目も設定し、その比較も行う。

3. 授業の開発

3.1. 授業で取り上げるいすみ鉄道の概要

いすみ鉄道の前身は国家が鉄道を保有し、経営していた時代からある木原線という名の路線である。国が経営していたが経営難で民営化され、木原線はいすみ鉄道として、1988 年 3 月から第三セクター鉄道として開業した。廃線寸前であった鉄道だが、地域の人々の力や新しく就任した鳥塚社長のアイデアなどで今では観光鉄道として人気がある。現在は、メディアに登場したり、

CM の撮影に使用されたりといった活動の場が増えている。

3.2. いすみ鉄道を題材にした授業制作

本授業は、3 時間で 1 つの単元構成とする。本授業は、千葉県を身近な地域として位置づけて、千葉県いすみ市・大多喜町を走るいすみ鉄道はどのようにして廃線の危機から脱したのかを考える授業を通して、生徒が千葉県という地域について自分自身の問題として考えられるような形で授業の開発を行った。

また、問題の所在でも述べたとおり、現在地理分野での身近な地域の学習が重要視されているにも関わらず、実施している教員は少ない。附属中学校へ通う生徒は千葉県だけではなく、千葉市以外からも通っているため、ここで述べる身近な地域の学習は千葉県という範囲に設定した。

身近な地域学習の授業として、鉄道を取り上げた理由は、移動制約者である生徒にとって鉄道の存在は大きいと考えたからである。附属中学校がある千葉市稲毛区は幸いなことに JR 線や京成線など、鉄道が多く通っている。徒歩で通学している生徒もいるが、千葉市以外から通う生徒も多いため、附属中学校に通うために鉄道を利用している生徒が多い。したがって、鉄道は生徒にとって身近なものであると考え、鉄道を走る地域の現状を踏まえた上で、授業に鉄道を取り上げた。

そして、千葉県を走る鉄道のなかでも、いすみ鉄道を取り上げた理由は 2 点ある。

1 点目は、地域の生き残りをかけて経営をおこなった鉄道であるからだ。千葉県という地域に住んでいるが、ほとんどの生徒が住んでいる地域は千葉県の北西部に位置しており、それ以外の地域について知る機会が少ない。移動制約者³の生徒にとって、鉄道会社が多額の負債を抱えていたにも関わらず、地域の生き残りをかけて経営し、地域活性化へとつながり、現在も廃線せずに走っているという事実は奇想天外なものであり、興味を引くと考えた。

2 点目は、いすみ鉄道が観光鉄道であるからだ。鉄道の中でもいすみ鉄道は、附属中学校周辺を走る JR 線や京成線とは大きく違い、千葉市よりも人口が少なく景観も全く異なる地域を走る観光鉄道である。廃線寸前の危機を脱し、観光鉄道へと生まれ変わったいすみ鉄道を取り上げることで、千葉県という身近な地域に自分が住んでいる地域とは全く別の地域があることに気づくことが考えられる。

しかし、事前に子どもたちへいすみ鉄道が走るいすみ市・大多喜町のことを知っているのかどうか問うと、ほとんどの子どもたちが知らなかった。地理の学習としても、千葉県に住んでいる住民としても、大まかな千葉県

の市町村の位置について学習する必要があると考え、1時間目に千葉県の観光入込客数⁴の上位にランキングしている千葉県の各市町村や各地域を Google マップ⁵で学習し、位置を確認することとした。

3.3. 授業のねらいと展開

本授業のねらいは以下のように設定した。

- ① 自分たちが住んでいる千葉県を身近な地域として認識し、興味関心をもつことができる。
- ② 千葉県いすみ市・大多喜町を走るいすみ鉄道が廃線の危機からどのように脱したのか、グラフや写真などの資料から考察することができる。
- ③ 千葉県という身近な地域に興味関心を高めた上で、自ら調べたり、地域のことについて考えたり、行動したりすることができる。

表11 時間目の授業プラン

時間	生徒の動き
3分	<ul style="list-style-type: none"> グループに分かれる。 生徒が知っている千葉県の市町村を挙げる。
20分	<ul style="list-style-type: none"> 千葉県の観光入込数ベスト20の資料と Google マップを使って地図にマッピングする。 タブレットでGoogleマップを開いてワークシートにマッピングをする。
2分	マッピングして気づいたことを発表する。
10分	<ul style="list-style-type: none"> 夷隅地域にはどのような街があるのか Google マップを使い、推測する。 グループごとに推測した内容をまとめる。 いすみ市・大多喜町の概要を知る。
7分	<ul style="list-style-type: none"> 夷隅地域を走るいすみ鉄道の概要を知る。
3分	<ul style="list-style-type: none"> 授業を振りかえる。

表22 時間目の授業プラン

時間	生徒の動き
3分	<ul style="list-style-type: none"> 前時の復習
7分	<ul style="list-style-type: none"> いすみ鉄道が平成18年には1億2700万円の赤字を出していたことを知り、同時にいすみ鉄道の乗車人員・いすみ市・大多喜町の人口推移のデータを見る。 いすみ鉄道の運輸人員と沿線地域の人口が書かれた資料を見る。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 廃線寸前であったいすみ鉄道がどの

	<ul style="list-style-type: none"> ようにして廃線の危機から脱したのか個人で考える。
15分	<ul style="list-style-type: none"> Googleマップのストリートビュー⁶や配布資料を参考にしながら、2人から3人のグループで考える。
10分	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに考えをまとめ、発表の準備をする。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 授業を振りかえる。

表33 時間目の授業プラン

時間	生徒の動き
3分	<ul style="list-style-type: none"> 前時の復習
5分	<ul style="list-style-type: none"> 前回、グループごとに考えた廃線の危機から脱出した策をグループごとにまとめる。
10分	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに発表する。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年以降のいすみ鉄道乗車人員の推移を見る。 いすみ鉄道収入グラフを見て、平成21年から平成26年まで約8000万円増加したことを知る。
10分	<ul style="list-style-type: none"> いすみ鉄道が講じた3つの切り口を知る。
3分	<ul style="list-style-type: none"> 授業を振りかえる。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 事後アンケートの記入

4. 授業実践とその考察

4.1. 授業実践校と選択教科について

本授業は、附属中学校の3年生用選択教科にて2016年度前期に開講された「ローカルな変化から社会を読み解く—おもちゃ工場からローカル鉄道まで—」の選択社会の中で実践をした。附属中学校では、2・3年生が履修する授業において週1時間の選択教科が設置されている。選択社会以外にも講座は複数あり、生徒が希望する講座を調査し、人数が上限を上回った場合には人数調整を行い、講座は決定される。

4.2. 1時間目の授業の実際と考察

まず、1時間目の授業の実際と考察を記述する。1時間目は大きく分けて2つの場面から考察していく。1つ目は Google マップを用いて千葉県の観光入込客数ベスト20の市町村を白地図へマッピングした場面についてである。授業の前半部分では、2点の動機付けを行った。1点目は千葉県の観光入込客数ベスト20にある市町村をマッピングすることで、自分たちが住んでいる千葉県には多くの市町村があり、多くの観光地があること

を知ることである。2 点目は、Google マップを用いることで、生徒自身が住んでいる千葉県の市町村について興味をもつことである。

2 つ目は千葉県の夷隅地域について扱った場面についてである。ここでは、授業前半部分に千葉県の白地図にマッピングしたことをもとにして、ベスト 20 にランクインしていない夷隅地域について詳しく見ていくことにした。千葉県を 10 個の地域に分けた際に観光入込客数が 1 番少ないのが夷隅地域であった。夷隅地域の中で 1 番観光入込客数が多い勝浦市を Google マップで確認したあと、いすみ市と大多喜町について見ていった。2 時間目の授業ではいすみ鉄道について取り扱っていくのでいすみ市・大多喜町についての概要を知っておく必要があると思い、千葉県の中でいすみ市と大多喜町の位置を確認し、附属中学校がある千葉市と面積や人口を比較した。生徒の振り返り⁷からは、

生徒 D 「今まで千葉にどんなものがどこにあるのか全然知らなかったけど今日の学習で知ることができた。人口や面積もからめてだったのでためになった。」

と記述があったことから、千葉県の夷隅地域について取り扱ったことで次の授業へとつなげることができ、いすみ鉄道が走る沿線の街を知ることができたと考えられる。

4.3. 2 時間目の授業の実際と考察

次に、2 時間目の授業の実際と考察を記述する。2 時間目は大きく分けて 2 つの場面から考察していく。1 つ目は、グラフからいすみ鉄道の乗車人員が減少している理由を考える場面についてである。1 時間目の授業では、いすみ鉄道が走るいすみ市・大多喜町の概要について学習したため、2 時間目ではいすみ鉄道の概要を伝えた。概要を伝えた後にいすみ鉄道の乗車人員が減少しているグラフといすみ市・大多喜町の人口推移のグラフを提示して、いすみ鉄道沿線の人口はそれほど変化していないのに、乗車人員が大きく減少している理由を個人で考えてもらった。生徒の発表では、

生徒 E 「他の乗り物に乗っている。」

生徒 F 「子ども自体が減った。」

生徒 H 「子どもが電車を利用しない。」

が挙がった。子どもの人口が減っているのではないか、という意見やそもそも鉄道を利用しない人が増えたという意見が出た。

2 つ目は、いすみ鉄道は廃線を検討されていたが、存

続していることを踏まえて、なぜいすみ鉄道は廃線の危機から脱出できたのか、その理由と策を考える場面についてである。この場面では、生徒にいすみ鉄道の PR ポスターをみてもらい、生徒が各自で感じたことや考えたことをワークシートに記述してもらった。その後は 4 人、3 人、4 人のグループに分かれて、班ごとにタブレットを 1 台使用し、Google マップやストリートビューを参考にしながら班の意見を考える活動とした。活動の時間には、生徒 I から「なにもないのが好きな人が行くんじゃない」生徒 F から「なんにもないけど、景色はいいよね」との意見が出ていた。生徒 I はいすみ鉄道沿線には本当になにもないと考え、その地域に価値を見出すことが出来なかったが、生徒 F はなにもないことは認めつつも、景色の良さを指摘していた。生徒の振り返りから生徒 A は、「実際に 2 年生のときに学校にいすみ鉄道 PR ポスターがあり、自分も気が引かれた。やはりポスターなどの広告は効果があるのだと感じた。」生徒 J は、「なにもないの極みだったからここまで成功したのになって思った。中途半端じゃだめ。」という記述があった。生徒 A からはいすみ鉄道の PR ポスターについて記述があり、実際に目で見たことが書かれている。広告による宣伝効果について実体験をもとに書かれていることがわかる。生徒 J からはいすみ鉄道は中途半端に観光施設があるのではなく、なにもないの極みだったからよかったのではないかと記述があり、地域のあり方として、大きな特徴をもっていたから廃線しなかったという観点をこの授業で持てたといえる。

4.4. 3 時間目の授業の実際と考察

最後に、3 時間目の授業の実際と考察を記述する。3 時間目は大きく分けて 2 つの場面から考察していく。1 つ目は 2 時間目の授業でグループごとに考えたいすみ鉄道が廃線の危機から脱した策を発表した場面についてである。生徒には 3 時間目の授業冒頭 5 分で最終的な発表原稿をまとめ、班ごとに発表してもらった。2 時間目の時点でグループは 3 つの班に分けていたため、発表順を決め、2 班、1 班、3 班の順で発表することになった。2 班を代表して生徒 G が発表した。生徒 G は唯一いすみ鉄道に乗車したことのある生徒であったので、とても詳しくいすみ鉄道が講じた策について発表していた。1 班を代表しては、生徒 A が発表した。1 班は電車に乗ってどこかに行くのではなく、その電車に乗ること自体が目的となっている人がいすみ鉄道にたくさん来ているのではないかということを強調して述べていた。これは実際に Google マップのストリートビューを見て思いついた、ということが生徒 F の 2 時間目の授業振り返りから考えられた。2 班は廃線しないためにどのような策を講じたのかを考えるというよりも、いす

み鉄道沿線にはどのようなものがある、どのような人をターゲットにしているかを中心的に述べていた。3班を代表しては、生徒Eが発表した。3班は4人で協力して発表原稿を作成していた。特に強調したいところとしては、都会にはない素晴らしい景色を見にくる人が多いのではないかとことをあげていた。田舎ということ隠すのではなくPRして、ノスタルジー⁸を思わせる空間を作っているのではないかと意見が出た。3班は地域のよさを生かしながら、観光客を呼び込むためにいすみ鉄道は活動したのではないかと考えていた。

1班から3班のグループに発表をしてもらい、生徒自身、千葉県といすみ市・大多喜町は同じ千葉県なのに環境が大きく異なることを感じたと考えられる。夷隅地域を走るいすみ鉄道の場合は生き残りをかけて地域のよさを生かしつつ、ターゲットを絞っているということが生徒の間では驚きであったようだ。生徒の振り返りから、

生徒D「ターゲット(鉄オタ)を絞ってサービスを工夫をしたりするだけで廃線から復活できるなんてすごいと思った。そして、成功するか分からないのに実行した根性が凄いなと思った。」

生徒E「鉄オタクをターゲットとしてねらっているのにこんだけかせげるのはすごいと思った。自分は欲しくはないが、ここまでの赤字を黒字にするのはとてもすごい！」

という記述があった。いすみ鉄道が地域の足として存続するためにターゲットを鉄道ファンに絞ったことは伝わっていたが、それが原因で赤字から黒字に変わったということではなかったため授業者の説明不足であった。廃線せずに存続するためには黒字にならないといけないという生徒の先入観があったと考えられる。グループで考えて発表したことにより、それぞれが考えたことはいすみ鉄道が講じた策につながっていたと感じることができたと考えられる。

2つ目はいすみ鉄道が実際に講じた策について見ていく場面である。生徒に発表してもらったあとに、実際にいすみ鉄道が講じた策についてスライドを用いて説明した。6つの写真から生徒が発表した内容に即して、車両について、オリジナルグッズについて、地元産品の販売について、駅名ネーミングライツについて、枕木オーナー制について、花壇オーナー制についての順番で内容を見ていった。特に生徒が驚いていたのは枕木オーナー制についてであった。家に持ち帰ることができない枕木を買うという考えを理解することが難しかったようである。生徒は、自分が欲しいと感じないものを購入している人がいることを学ぶことができたと考えられる。

また、バラスト石⁹という貴重な石を缶詰に入れて実際に売っているということを授業で紹介した際にも枕木オーナー制を扱った時と同じくらい驚いていた。いすみ鉄道に乗り込んだことがあり、鉄道ファンである生徒Gは聞きながら話を聞いていたが、他の生徒は「これは本当?」「石をわざわざ買うの?」と言っていた。この場面では、生徒Gが実際にバラスト石の缶詰を持っているという情報を授業で聞き、多くの生徒が驚いていた。

4.5. アンケートの考察

本研究では、1時間目の授業が始まる前に生徒が集まる時間があった。その際に授業に関するアンケートということで、本授業を受講する生徒に事前アンケートを、3時間目の授業の終わりに全3回の授業を終えて、事後アンケートをそれぞれ答えてもらった。また、事前・事後アンケートで同一項目の結果については比較を行った。そして、事後アンケートと被っていない項目についても考察を行った。

事後アンケートの項目から考察する。「今後、Google mapを使用して自分が住んでいる地域を見たいと思いますか?」という項目に対しては、とてもそう思うが9名、ややそう思うが2名であった。この項目は、地域について興味関心が高まった場合、自分が住んでいる地域も興味関心を向けると考えて設定した。授業ではGoogleマップを使用して千葉県の観光入込客数ベスト20の地域やいすみ鉄道が走るいすみ市と大多喜町を中心にみた。受講者全員が肯定的な回答をしている。授業を通して、自分が住む地域についても行動ベースで興味関心が高まったことが分かるため、一定の成果があったと考えられる。

また、「千葉県の各地域についてもっと学びたいと思いますか?」という項目に対しては、とてもそう思うが5名、ややそう思うが5名、あまりそうは思わないが1名であった。この項目は、千葉県の各地域について興味関心が高まった上で自分が住む他の地域についてはもちろん、他の地域についても学習意欲があるのかを聞いた。本授業においては千葉県を身近な地域として扱い、1時間目に千葉県を10の地域に区分けした。今回扱ったのは夷隅地域であり、他の地域についても興味関心が高めることに一定の成果があったといえる。しかし、「あまりそうは思わない」と回答した生徒が1名いた。あまりそうは思わないと回答した生徒は事後アンケートの④項目においては自分が住んでいる地域についての興味関心は高いといえるが、千葉県の他の地域についての関心はそれほど高くならなかったことがわかる。

「自分が住んでいる地域についてもっと学びたいと思いますか?」という項目に対しては、とてもそう思うが6名、ややそう思うが5名であった。この項目では、

自分が住んでいる地域についてさらに学びたいかを聞いた。本授業では千葉県を身近な地域として学習を進めたが、この項目における地域とは生徒自身が住んでいる地域としている。授業を受講した生徒、11人全員が肯定的な回答をしている。授業を通して、自分が住む地域への興味関心が高まったことが分かる。

「いすみ鉄道の取り組みを考える活動について、感想を書いてください。」では、多くの感想が書かれた。何人かの生徒の例を挙げて考察をする。生徒 C については、鉄道だけが収入じゃないことに驚いた、との記述があり、鉄道だけではなくオリジナルグッズを販売したり、旅行業などで売り上げを伸ばしていたりしていることは意外性が高かったようだ。いすみ鉄道が地域の足として存続していくためには、鉄道会社だからといって鉄道だけではなく、他の事業にも取り組む必要があることがわかったといえる。

生徒 F、生徒 G については、「知らないことを知れた。」との記述があり、千葉県に住んでいながらも知らないことが多いと認識できたと考えられる。生徒は、附属中学校が位置する地域とは全く異なる地域がどのようにして活性化したのかを考えた。したがって、これからの社会を生きる生徒が地域活性化を考えるきっかけになったといえる。

4.6. 受講者へのヒアリングを受けての考察

本研究の実施日から約 2 か月後¹⁹⁾に、対象の中学生 11 名のうち、生徒 A, E, F, G, H の 5 名から授業を受けた後の変化についてヒアリングを行った。

事前アンケートで地域について興味があると答えた生徒 3 名、地域について興味がないと回答した生徒 2 名に対して、「授業を終えて 2 か月ほど経過しているが、自分が住む地域について、もしくは千葉県の他の地域について興味を持って調べたり、わかったりしたことはありますか。」という問いを最初に投げかけた後、ヒアリングを開始した。ヒアリングを開始した後は、生徒が答えたことに沿って掘り下げながら具体的な内容を聞いていった。また、事前アンケートで自分が住む地域について興味があると答えた生徒は A・G・H の 3 人、自分が住む地域について興味がないと答えた生徒は E・F の 2 人である。

以下、ヒアリングによって得られた回答の内容をまとめる。

生徒 A 「私は京成線を使っていて最寄り駅が千葉中央なんです、その先のちはら台には行ったことがなかったので授業を終えた後、友達と行きました。授業前までは行ったことがなかったんですが、ちょっと気になっ

て行ってみました。」

生徒 E 「授業では千葉市と夷隅のほうは同じ県なのに全然違うことがわかりました。今まで自分が住んでいる地域について興味はなかったんだけど、夷隅のほうに興味というよりも自分が住んでいる地域に興味を持た

生徒 F 「自分が住んでいる八千代市には地域おこしとかやっていることがわかった。でも、いすみ鉄道の取り組みは少し違って、簡単には思いつかなかった。地域については関心は高まったが、何を以てして田舎というのか少し疑問を持ちました。」

生徒 G 「いすみ鉄道についてはもともと興味があったので、知っていたが周辺地域のことについてはあまり知りませんでした。授業では乗車グラフとか人口のグラフを見たので社会の資料集とかで人口のグラフが気になるようになりました。」

生徒 H 「最近知ったことは、千葉市の美浜区に住んでいるんですが、浅間神社の中に貝殻があつて、不思議に思って調べてみると昔はそこまで海岸線だったことがわかりました。」

生徒 A は京成線を通学で利用しており、授業を終えた後、京成千原線の終点であるちはら台駅まで行ったようだ。授業前までは一度も訪れたことがなかったが、自身がよく利用する鉄道の終点ということで気になったようである。また、Google マップのストリートビューは使ったことがなかったため、これから使ってみようと言っていた。

生徒 E は夷隅地域について学習し、自らが住む千葉市との違いに驚いたという。いすみ鉄道の会社経営的なもの考えるととは思っていなかったとも言っていた。千葉県の他の地域について興味をもつというよりも、自分が住んでいる地域について興味をもつようになったようだ。

生徒 F は自分の住んでいる市では地域おこしは思いつかないため、いすみ鉄道の取り組みを不思議に思ったようである。また、千葉県は東京に近くて立地も恵まれているから、その立地をより生かせれば人も集まっているのではないかと考えていた。また、自分が住んでいる市は田舎だと周囲にいわれるが、いすみ市・大多喜町のように中途半端ではない田舎のほう地域活性化をする上ではいいのではないのかと感じた、との意見があった。

生徒 G はいすみ鉄道についてはもともと興味関心が

高かったので、授業へも真剣に取り組んでいた。授業の中で見たいすみ鉄道の乗車数のグラフは初めてみたそう、授業後も社会科の授業で人口のグラフを意識的に見るが増えたといえる。

生徒 H は授業を終えて、自身の住んでいる地域にある浅間神社の中に貝殻があることを発見し、不思議に思い、調べたところ、そこまで海岸線であったことがわかったと言っていた。千葉県他の地域に関しては千葉県内で唯一の村である、長生地域が特に気になったとのことだった。Google マップのストリートビューは使ったことがあったので扱いやすかったようだ。

以上の 5 人のヒアリングから、事前アンケートで地域について興味がないと回答した生徒に関しては、千葉県の他の地域に興味関心をもつというよりも自分が住んでいる地域について興味関心が高まったことがわかった。また、事前アンケートで地域に興味があると回答した生徒に関しては、授業後に実際に千葉県の他の地域について調べたり、疑問に感じていたことにたいして理解が深まったりしていた。授業の中ではグラフや写真などの資料を多く活用していたため、授業が終わったあとも人口などのグラフを、興味をもって見るようになったことで、地域への見方が変わった生徒もいることがわかった。

5. 研究の成果と課題

本研究の成果は 2 点ある。1 点目は、千葉県を走る観光鉄道である、いすみ鉄道を題材とした授業を開発したことで生徒自身が住む千葉県のある地域に興味関心をもって学習できたということである。2 点目は、重要性が高いとされている身近な地域学習の単元を開発し、実践したことで生徒自身が生活している地域についての課題を見つけ、地域の課題解決のためにどのようにしたらよいかを考える能動的・体験的な活動を促すことができたことである。

今後の課題としては、授業を改善することと本研究における授業以外にも身近な地域の学習という単元の授業を開発し、実践することが挙げられる。今回の授業では、千葉県の他の地域と生徒自身が住む地域の違いを学習するためにも身近な地域を千葉県に設定した。他の地域に興味関心を持つというよりも、自分が住む地域についての興味関心が高まったため、自分が住む地域についての興味関心が高まること以外にも他地域にも興味関心を生徒が持てるような工夫をすることが必要であると考えられる。

¹本論文は、筆者の平成 28 年度千葉大学教育学部卒業論文「千葉県を走る観光鉄道から地域のあり方を考える授業の開発—いすみ鉄道を題材に—」の内容を抜粋し、再構成したものである。

る。
²自動車が生活必需品として普及する現象のこと。三省堂大辞林を参照に記述。
³移動制約者とは、高齢者・障害者よりは広い枠組みで捉えた、交通行動上、人の介助や機器を必要としたり、さまざまな移動の場面で困難を伴ったり、安全な移動に困難であったり、身体的苦痛を伴う等の制約を受ける人々を指す。
⁴入込客とは、観光地や遊園地などの施設、観光地域などの入場者数、来訪客のことのこと。自治体などが地域に訪れた観光客数を「観光入込客数」と表現することがある。
⁵Google 社が提供するオンライン地図情報サービス。マウスでドラッグすることでスクロールでき、指定した地域のショップやレストラン、サービスなどを検索したり、目的場所の地図やその付近の様子を確認したりすることができる。通常の地図表示のほか、衛星写真を表示する写真表示や、地図と写真を複合的に表示することもできる。
⁶Google ストリートビューとは、Google が提供している、目線の高さ撮影された路上風景をパノラマ写真で閲覧することができるサービスである。Google ストリートビューは Google マップや Google Earth で利用できる。地図上で表示可能な場所にペグマンと呼ばれるアイコンをドラッグすると、その箇所で撮影された周囲 360 度の写真画像を見渡すことができる。
⁷生徒の実名を公表することはプライバシー侵害にあたるため、文中では、生徒 A,B,C,D,E,F,G,H,I,J,K のようにアルファベットで表すこととする。生徒 A、F は女子生徒、その他は男子生徒である。
⁸生徒に興味を尋ねてみたところ、懐かしいと思う気持ちであるとの答えが返ってきた。
⁹線路にしいてある石。線路のクッションとしての役割がある。
¹⁰本講座の 11 回目にあたる 7 月 15 日であり、同研究室のメンバーである北爪が確認テストを行い、筆者はヒアリングを行った。

参考文献

- 荒井威雄 (2005) 「社会科における単元構想力を向上させる視点と方策—小学校中学年の地域学習を通して—」 静岡県総合教育センター長期研修「研究報告」 p. 39
- 岩橋康紀 (2008) 「地域学習の効果的な指導のために ~単元構想図をもとにした授業展開の工夫~」 福島県教育センター長期研究員個人研究報告書 p. 2
- 碓井照子 (2008) 「地理歴史科教員の実態と地理的知識低下の問題点」 『学術の動向』 Vol. 13, No. 10, pp. 13-14
- 岡山県教育センター (2001) 「中学校における地域学習に関する研究—社会科から総合的な学習の時間への発展—」 研究紀要第 222 号 pp. 1-33
- 経済産業省エネルギー庁 (2006) 「平成 17 年度エネルギーに関する年次報告」
<http://www.enecho.meti.go.jp/about/whitepaper/2006html/2-1-2.html> (2017 年 2 月 25 日最終確認)
- 国土交通省 「地方鉄道の活性化に向けて」を参照
www.mlit.go.jp/common/000048885.pdf (2017 年 2 月 25 日最終確認)
- 国土交通省鉄道局・観光庁 (2013) 地域鉄道再生・活性化等研究会報告書「観光とみんなで支える地域鉄道」
<http://www.mlit.go.jp/common/001002354.pdf> (2017 年 2 月 21 日最終確認)
- 国土交通省ホームページ 地域鉄道対策
http://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk5_000002.html (2017 年 2 月 25 日最終確認)
- 総務省統計局ホームページ
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/> (2017 年 2 月 25 日最終確認)
- 鉄道まちづくり会議 (2009) 『どうする？鉄道の未来』 緑風出版
- 堀川紀年 (2007) 『日本を変える観光力——地域再生への道を

探る』昭和堂

堀畑まなみ (2010)「地方鉄道廃止が及ぼす地域社会への影響」

『桜美林論考. 自然科学・総合科学研究』 第1号、p. 58

松岡尚敏・佐藤誠希 (2012)「中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習：まちづくりの視点からみた社会参加型学習の試み」『宮城教育大学紀要』第47号

pp. 11-25

文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 社会編 (2014年一部改正)』東洋館出版

謝辞

研究を進めるうえで、鳥塚社長をはじめとするいすみ鉄道株式会社の方々にはインタビューのご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。